連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 64 回　ナデシコ科の植物

もとよし　ふさお
本吉 總男　2021 年 11 月

カワラナデシコを代表とするナデシコ科の植物はハコベのような小さくて地味な植物からカーネーションのような美しい園芸植物まで多様です。ナデシコは漢字で「撫子」と書きます。

参考写真：カワラナデシコ（ピンクと白花）
5月中旬　東京都調布市神代植物公園
園芸品種である可能性があります。ピンクの方は野生種に近いと思われます。

カワラナデシは古くからよく知られた植物で、単にナデシコといえばカワラナデシコのことです。ヤマトナデシコとも呼ばれ、「日本女性の清楚な美しさをたたえていう語（広辞苑）」にもなっています。

ナデシコ、すなわちカワラナデシコは秋の七草のひとつに数えられていますが、実際には初夏から初秋にかけて咲きます。カワラナデシコは本州、四国、九州や東南アジア温帯に分布する多年草で、日本では以前は山野に普通に見られる植物だったようですが、花が美しいために採取されやすいせいか、全国的に数を減らしているようです。みずき野周辺でも自生のものを見たことがありません。参考のため、神代植物公園で撮ったカワラナデシコの写真を載せておきます。カワラナデシコの野生のものは、花色がピンクですが、白花や赤花の園芸品種もつくられています。

今回は、主としてみずき野やその周辺で見たナデシコ科の植物について述べることにします。

1　ツメクサ

ツメクサは、第１５回「帰化植物たち」でも、名前の似たシロツメクサやアカツメクサとの違いについて、参考のため載せています。シロツメクサやアカツメクサはマメ科の植物で、漢字では「白詰草」、「赤詰草」と書き、ここに述べるツメクサは「爪草」と書きます。爪草の名は葉の形に由来します。

ツメクサ　5月中旬　みずき野7丁目

ツメクサは道ばたによく見かけるツメクサ属のごく普通の小さな植物で、庭にもはびこる雑草です。一年草で地面を覆うように広がり、小さな白い花を春から初夏まで咲かせます。日本列島を含め、東アジアに分布しています。

2　ノミノツヅリ

ノミノツヅリはノミノツヅリ属の植物で、道ばたにごく普通に見られる高さ5～20センチの越年草。日本列島をはじめ、アジアやヨーロッパに原産し、現在は世界各地の温帯や亜熱帯に帰化しているようです。小さな白い花を春から初夏に咲かせます。漢字では「蚤綴」と書きますが、「綴（つづり）」とは粗末な衣服（『広辞苑』）のことで、ノミノツヅリという名称は小さな葉を綴（つづり）に例えたものと思われます。

ノミノツヅリ（右は葉・茎・花の拡大）４月下旬　みずき野５丁目

3　ハコベ属の植物

みずき野周辺でよく見られるハコベ属植物はコハコベ、ミドリハコベ、ウシハコベ、ノミノフスマの4種です。花はいずれも春によく見られます。これらについては第１１回「春の野の草花」で紹介していますが、ナデシコ科の主要な植物ですので、今回も、写真と簡単な説明を載せておきます。なお、ハコベは漢字で「繁縷」または「蘩蔞」と書きます。

コハコベとミドリハコベは一般にハコベと呼ばれています。両種とも世界各地に分布する植物です。第１１回「春の野の草花」ではコハコベは大正期に日本に入った帰化植物と書きましたが、これは一説で、古代から日本に存在したとする説が一般的のようです。しかし『日本帰化植物写真図鑑』（全国農村教育協会）では帰化植物に分類されており、コハコベは

「1922 年に東京で気づかれ、その後日本中で知られるようになった」とあります。コハコベが在来種とすれば、以前は在来種ミドリハコベと区別されていなかったのかもしれません（これは私の推測です）。

コハコベの葉はミドリハコベの葉より小さく、濃緑色で、茎は紫がかっています。雄しべは 3～5 本です。一方、ミドリハコベの葉はコハコベの葉より大きく、明るい緑色で茎は緑です。雄しべは8～10本あります。

コハコベ （右は葉と花の拡大） 3月中旬 みずき野7丁目

ミドリハコベ （右は花の拡大） 4月中旬 みずき野7丁目

ウシハコベは、日本列島を含むアジアやヨーロッパに分布する越年草で、コハコベやミドリハコベより株全体も花も大きく、外観で区別がつきます。ウシハコベの花の花柱（かちゅう）（雌しべの上部に突き出た柱状のもので、頂端（柱頭（ちゅうとう））に花粉がつく）の数は5本で、コハコベやミドリハコベでは3本です。

ウシハコベ （右は茎、葉、花の拡大） 4月下旬　取手市貝塚地区

ノミノフスマは日本列島を含む東アジアの温帯に分布する越年草で、畑地によく見られます。花はコハコベやミドリハコベに似ていますが、コハコベやミドリハコベの葉には葉柄（ようへい）（葉の一部で葉身と茎をつなぐ柄（え））があるのに対し、ノミノフスマには葉柄（ようへい）がなく、葉身が茎に直接ついています。

ノミノフスマ （右は茎、葉、花の拡大） 4月下旬　取手市貝塚地区

4　オランダミミナグサとミミナグサ

オランダミミナグサとミミナグサはともにミミナグサ属の植物です。これらの植物についても第１１回「春の野の草花」で紹介していますが、欠かせない植物なので再度ここにも載せることにしました。

オランダミミナグサはヨーロッパ原産の越年草で広く北アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカ大陸の温帯に広がっている旺盛な雑草です。みずき野周辺にも道ばたや野原に多く見られ、庭にも侵入してきます。

ミミナグサは日本列島を含む東南アジアに分布する越年草です。みずき野周辺でもよく見かけますが、オランダミミナグサと比べるとはるかに少なく、オランダミミナグサの勢いに圧倒されているように思われます。

両種とも春から初夏にかけて花が咲きます。オランダミミナグサの茎は緑色ですがミミナグサの茎は褐色ないし赤褐色のものが多くみられます。しかし緑色に近いものもあります。ミミナグサはオランダミミナグサより花柄（かへい）（花と、茎や枝とをつなぐ細長い部分）が長い、花弁がやや広いなどの特徴があります。

オランダミミナグサ （右は花の拡大） 4月下旬 みずき野第2調整池付近

ミミナグサ （右は花の拡大） 4月下旬 みずき野第2調整池付近

ミミナグサの名の由来は、『広辞苑』には、「葉の形がネズミの耳に似ているからいう」とあります。ミミナグサについては、後述の「余談」にも載せています。

5　マンテマ属の植物

マンテマ　5月上旬　守谷市百合ヶ丘地区

マンテマはヨーロッパ原産の越年草です。『日本帰化植物写真図鑑』（全国農村教育協会）には「江戸時代に観賞用に導入され、その後逸出して野生化した」とあります。現在は本州、四国、九州に分布し、市街地にもよく見られるようです。茎は40センチ前後、花期は春～初夏です。マンテマという名は『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館）には、「本種が渡来したころムギセンノウ属　Agrostemma　の植物であるとし、その学名からマンテマンとよばれていたものが、「ン」が略されてマンテマになった、と牧野富太郎は記している」とあります。

ほかにマンテマ属の植物の写真がないかと、古い写真（2010年）を探していたら、サクラマンテマと思われる写真が出てきました。これらの写真をどこで撮ったか、記憶にないのですが、同時に撮った写真から推測すると、第2調整池付近と思われます。

サクラマンテマは地中海沿岸地方の原産で、日本では一年草の園芸植物として栽培されていますが、野生化しているものもあるようです。マンテマやサクラマンテマは、萼（がく）が袋状になっていて、花の下部を覆っています。それゆえ、サクラマンテマはフクロナデシコとも呼ばれています。下の写真のサクラマンテマと思われる植物の萼（がく）はあまり膨らんでいませんが、サクラマ

サクラマンテマと思われる植物　（右は花の拡大）　4月下旬　第2調整池付近か

ンテマの多くは、萼(がく)がもっと膨らんでいます。サクラマンテマにはいろいろな園芸品種がありますので、これもまた、萼(がく)に特徴のあるサクラマンテマの一品種ではないかと思われます。

マンテマ属の植物の中で、比較的よく知られているものに、ムシトリナデシコがあります。茎は50センチ前後で初夏に花が咲きます。花は濃いピンクで直径1センチほど。茎の先端に群がって咲きます。ムシトリナデシコは、ヨーロッパ原産で、日本では一年草の栽培種ですが、野生化して、道ばたや荒地によく見られます。ムシトリナデシコという名称は、茎の節の下に粘液を分泌し、その部分に小さな昆虫が付着することがありますが、食中植物ではありません。みずき野町内でもたまに見かけることがありましたが、残念ながら写真に撮っていませんでした。

6　スイセンノウ

センノウ属にはセンノウ（仙翁）という植物があり、その名は京都・嵯峨の仙翁(せんおう)寺で最初に見つけられたことによるのだそうです。このことからセンノウ属の植物の多くは、フシグロセンノウ、マツモトセンノウ、エゾセンノウ、マツヨイセンノウのように、〇〇センノウと名付けられています。スイセンノウもそのひとつです。

スイセンノウは、南ヨーロッパ原産の植物で、世界各地では園芸植物として栽培されています。漢字では「酔仙翁」と書きますが、酔っているように見えるのでしょうか。葉や茎には白毛が密生している状態からフランネルになぞらえて、フランネルソウとも呼ばれています。初夏から盛夏に濃いピンクまたは白い花を咲かせます。

スイセンノウ(赤花)
5月下旬　みずき野中央公園花壇

スイセンノウ(白花)
5月下旬　みずき野中央公園花壇

7　ムギセンノウ

ムギセンノウはその名称からセンノウ属の植物と思われがちですが、センノウ属ではなく、別属のムギセンノウ属の植物です。ヨーロッパ原産の一年草で、世界各地で野生化しているようです。しかし日本ではそれほど野生化していないように思われます。茎の高さは1メートル前後で、ナデシコ科の中では大型の植物です。初夏に花を咲かせます。別名のムギナデシコの名で呼ばれることが多いのですが、ムギセンノウが標準和名です。漢字では「麦仙翁」と書きますが、なぜ「麦」なのか、語源は不明です。牧野富太郎は、葉がムギのようなので、ムギセンノウの名があるとしています（『牧野富太郎植物記4』あかね書房）が、ヨーロッパでは主として麦畑の雑草だそうで、むしろこれが「麦」の由来かも知れません。英語では corn cockle といい、ヨーロッパでは corn は穀物のことで、主として麦類を指します。なお、アメリカでは corn はトウモロコシのことです。

ムギセンノウ
5月下旬　みずき野第1調整池花壇

8　セキチク

セキチクは上記のカワラナデシコと同じナデシコ属の中国原産の多年草で、日本には平安時代に入ってきたとされています。本来は多年草ですが、園芸では越年草または一年草として扱われています。茎の高さは通常30センチ前後ですが、品種によりもっと低いものもあります。花は春から夏にかけて咲きます。花の形はカワラナデシコに似ていますが、花弁の上端の切れ込みが浅いので見分けられます。

セキチクは「石竹」と書きますが、いつ頃から石竹と呼ばれるようになったのか、またその語源ははっきりしません。遅くとも江戸時

セキチク　10月中旬
みずき野文化財公園石垣下花壇

代には石竹という名が使われています（貝原益軒『花譜』）。また江戸時代には、石竹の多数の品種がつくられたようです。

余談：古典文学に見られるナデシコ科の植物

ミミナグサ（上記4：5ページ参照）という名が初めて古典文学に出ているのは、『枕草子』（岩波文庫の131）であろうと思われます。

> 七日の日の若菜を、六日、人の持て来、さわぎとり散らしなどするに、見も知らぬ草を、子どものとり持て来たるを、なにかこれをばいふと問へば、とみにもいはず、かれこれ見あわせて耳無草となんいふといふ者あれば「むべなりけり、聞かぬ顔なるはとわらうに、またいとをかしげなる菊の生ひ出でたるを持ち来たれば、つめどなほ耳無草こそあはれなれあまたしあればきくもありけりといはましけれど、またこれも聞き入るべうもあらず。

> 概要：
> 一月七日の前日六日に人がいろいろな若菜をとってきた。清少納言が知らない草の名を問うと、子どもの一人が、耳無草といいますといった。なるほど、聞かないという顔をした草というわけだねというと、とても風情のある若々しい菊もってきた子があったので、『つみ取られても耳無草には心が痛む、たくさんの草の中には聞く（菊）というのもあるのに』といいたいけれど、彼らには理解できないだろうな

「七草の節句」の時期の一節なので、文中に出てくる菊はもちろん花の咲いている菊ではなく、若い菊のことです。私は栽培菊ではなく、野菊を想像しています。子供の頃、父に連れられて、荒川区から渡し船で荒川を渡り、荒川の土手（足立区）で、ヨメナ（野菊の一種）をたくさん摘んできたことを憶えています。母がそのヨメナで炊き込みご飯をつくってくれました。懐かしい思い出です。

ここでは、ミミナグサを「耳無草」としていますが、『広辞苑』では「耳菜草」という字を宛て、「葉の形がネズミの耳に似ているからいう」としています。耳無草と耳菜草が同じものかどうかには多少の疑問が残ります。

源氏物語の「箒木」の巻の中の女性論「雨夜の品定め」の中で頭中将が思いびとについて語る件があります。源氏の友人、頭中将がある女から文をもらったと聞き、源氏は「さて、その文の言葉は」と問うと、頭中将は次のようにいいます。

いさや、異なることもなかりきや。山がつの垣は荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露（注:女からの歌）

おもひ出でしままに、まかりたりしかば、例のうらもなき物から、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露繁きをながめて、蟲の音にきほへる気色、昔物語めきて、おぼえ侍りし。

咲きまじる花はいづれとわかねどもなほ常夏にしくものぞなき（注:頭中将からの歌）

大和撫子をばさし置きて、まづ、『塵をだに』など、親の心を取る。

うちはらふ袖も露けき常夏にあらし吹きそふ秋も来にけり（注:女からの歌）

（以下略）

概要：

「私の家の垣根は荒れ放題ですが、時々はそこに咲く撫子（女と頭中将のあいだにできた子のこと）にどうぞ愛情をかけて下さい」（女からの歌）

そこで頭中将は、女を訪ねると、女は露しげき荒れた庭を眺め、虫の音と競うように泣いている様子が昔物語めいているように思った。

「咲いている花はいろいろあるが、常夏（撫子の別名とされている：ここでは女のこと）に優るものはありません」（頭中将からの歌）

大和撫子（子をさす）の方はさしおいて、「塵をだに」という歌にかけて、母親の心を引くようにした。

「塵をうちはらう袖は涙に濡れているのに、嵐が吹き荒む秋が来ました」（女からの恨みの歌）」

その後、「常夏」は行方知らずになりましたが、のちに源氏に見出されて愛人となったために物の怪に取り殺される薄幸な女性「夕顔」と同一人物です（「夕顔）」の巻）。さらに、「常夏」と頭中将との間にできた「撫子」は「玉鬘」の巻の成人したヒロイン「玉鬘」と同一人物です。

どの辞書にも、「常夏」は「撫子」の古名と書かれています。しかし、「撫子」については「大和撫子」という名も出てくるので、大和撫子すなわちカワラナデシコに違いないと思うのですが、「常夏」は「セキチク」と解してもいいような気がします（私見ですが、そういう考えもあるかもしれません）。「常夏」が「撫子」と同じであるよりも、違う植物である方が、すっきり解釈できるような気がします。）

なお、上文の中の「塵をだに」は、凡河内躬恒の歌を指しています。

ちりをだに　すゑじとぞ思ふ　咲きしより
いもと我がぬる　とこ夏のはな
（古今和歌集　巻第三）

この歌の内容は、「私が妻と一緒に寝る「とこ（床）」という名をもつとこ夏の花には咲いた時から塵も置かないように大事にしているのです」。ややこしい歌ですが、ひとことでいえば、妻をとても大事にしているということですね。

ちなみに現在「常夏」と呼ばれている植物は、日本で江戸時代につくられたセキチクの品種で、この品種が改良されて、さらに多くの品種がつくられました。上記8（9ページ参照）に述べたセキチク（石竹）は平安時代には唐撫子という名で呼ばれていました。『枕草子』（岩波文庫版の192）には、「唐撫子」という名が使われています。

いみじう暑き晝(あつ　ぴる)中に、いかなるわざをせんと、扇(あふぎ)の風もぬるし、氷(ひ)水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様(うすやう)を、唐撫子(からなでこ)のいみじう咲(さ)きたるに結(むす)びつけて、とり入れたるこそ、書(か)きつらんほどの暑(あつ)さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使(つか)ひつるだにあかずおぼゆる扇(あふぎ)もうち置(お)かれぬれ

概略：

ひどく暑い日、扇であおいでも風はぬるい。氷水に手を浸したりして騒いでいるとき、見事に咲いた唐撫子(からなでしこ)に結んだ真っ赤な薄い紙に書いた手紙か届いた。この暑さの中で文(ふみ)を書いてくれた　志(こころざし)　を思って、手にしていた扇を手ばなしてしまった

また、『枕草子』（岩波文庫版の67）には「草の花は、なでしこ、唐のはさらなり、大和のもいとめでたし」とあります。多様な園芸植物が存在する今では、セキチクは、それほど目を引く植物ではありませんが、平安時代にはとりわけ目立つ植物だったのだろうと想像しています。